

## 風姿花伝第三、問答条々

### 三 立合勝負の手立

問。申楽の勝負の立合の手立は如何。

〔口訳〕

猿楽の立合（競演）に於て勝を得る手段は、如何なる点にありますか。

答。これ肝要也。先、能

数をも持ちて、敵人の能に変かはりたる風体を、違へて為べし。序云、歌道を少し嗜

答。これは実に大切な事である。先づ第一に、自分が演じ得る能数を豊富に持つて居て、相手の能とは趣きを違へて、変つた風体の能を演ずるやうにすべきである。この花伝書の序に、「歌道を少し嗜むやうにせよ」と述べたのは、この為である。即ち、能の作者と

めとは是也。これ芸能の作

者別なれば、いかなる上手

も心のまゝにならず、自作

なれば、詞振る舞い、案の

内なり。されば、能を為ん

程の物の、知才あらば、申

樂を作らん事易かるべし。

これ此道の命也。

されば如何なる上手も、能

を持たざらん為手は、一騎

当千ほどの人なりとも、軍

陣にて兵具のなからん、是

同じ。されば、手柄の精

糲、立合に見ゆべし。敵方

それを演ずる者が別人である時は、換言すれば他人の作った能を演ずる時は、如何なる上手でも心のまゝに能をやることは出来ない。ところが、自分の作った能を自分で演ずるとなると、文句についても振舞についても、全く自分の思ふままである。それで、能が舞へる程の者で、学才があるなら、能を作ることはいと容易なことであらう。この能が作れるといふことは、此の道に於ける生命ともいふべきものである。

かやうな訳であるから、たとひどんな上手な役者でも、自分の能を持たない役者は、あたかも、一騎当千ほどの勇士でも、戦場に出て武器の無いのと同様で、とても思ふ働きは出来るものではない。だから、その人が、立派な働きが出来るかまづい働きしか出来ないかは、この立合勝負（競演能）で等よくあらはれるものだ。相手方の方で華やかな能を演じたならば、こちらは趣を変へて、閑かな能で、しかも

色めきたる能をすれば、閑<sup>しづや</sup>に模様<sup>もやう</sup>變<sup>うか</sup>はりて、詰<sup>つ</sup>め所<sup>どころ</sup>のある能をすべし。かやうに、敵仁<sup>てきじん</sup>の申樂<sup>さるがく</sup>に變<sup>か</sup>へてすれば、

敵仁<sup>てきじん</sup>の申樂<sup>さるがく</sup>に變<sup>か</sup>へてすれば、

いかに敵方の申樂<sup>さるがく</sup>善<sup>よ</sup>けれど

も、さのみには負事<sup>まくること</sup>なし。

若し能よく出<sup>い</sup>で来れば、勝<sup>かつ</sup>

事<sup>こと</sup>は治定<sup>ぢぢやう</sup>なるべし。

然<sup>しか</sup>れば、申樂<sup>さるがく</sup>の当座<sup>たうざ</sup>に於<sup>お</sup>い

ても、能に上中下の差別<sup>しゃべつ</sup>あ

るべし。本說<sup>ぜつ</sup>正<sup>ただ</sup>しく、珍<sup>めづら</sup>

しきが、幽<sup>ゆふ</sup>玄<sup>げん</sup>にて、面白<sup>おもしろ</sup>き

所<sup>ところ</sup>あらんを、善<sup>よ</sup>き能と申べ

し。よき能を、善く為たら

どこかに一際人の心を惹きつけるヤマのあるやうな能をするが良い。かやうに相手方の能と趣を違へて演ずるならば、どんなに相手方の能が良くても、こちらが負ける事は無い。若しこちらの能がうまく出来れば、相手方に勝つことは必定であらう。

かやうなわけで、実際に能を演ずる際に於ても、能に上中下の差別があるやうである。典拠出典が正しく、しかも珍らしい曲で、その出来が幽玄で面白い所があるといつたやうなのを、良い能（曲）といふべきである。かやうな良い能（曲）を良く演出して、しかもそれが成功したのを、演能の第一位とすべきであらう。能（曲）はそれほど上出来のものではないが、その本説のままに、疵の無いやうに演出したの

んが、しかも、出で來たら  
んを、第一とすべし。能は  
それ程ほどになけれども、本説ほんせつ  
の儘まに、咎とがもなく、善よく為せい

たらんが、出いで來きたらんを、

第二とすべし。能は似似而非ぜ  
能なれども、本説ほんせつの悪わるき所

を、中々便たよりとして、骨ほねを  
折をりて、よくしたるを、第  
三とす。

〔評〕

此の段の中心は、立合勝負に勝つ手段を説くのが眼目であり、「能数のうすう」を持ちて敵人の能に変りたる風体を違へて為せいべし」、「敵方色めきたる能のうをすれば、しづやに模様かはりて、つめ所のある能のうをすべし。かやうに

が、うまく成功したのを演能の第二位  
とすべきであらう。能（曲）は一向に  
つまらないものだが、その本説の悪い  
所を却つて手掛りとして、骨を折つて  
うまく演じ生かしたのを演能の第三位  
と定める。

敵人の申楽にかへてすれば、如何に敵方の申楽善けれども、さのみに負くる事なし。若し能よくいでくれば、勝つ事は治定なるべし」といふ条が、その中心である。その手段として、能を作る事の必要が説かれ、最後に

「曲柄の善悪が演出価値に及ぼす影響」について説かれてゐるのである。

敵人の能と模様風体の変つた能を演ぜよといふ教訓は誠に面白い。同じ風体の能であれば、よほど後の演者がすぐれてゐなくては、勝目が前者に多いことは、心理学的に考へても明瞭である。見物の倦怠の感じ、先入主となる心理、これだけを考へても、後の者が損をする事は明白である。模様が変れば、倦怠や先入主が安全に封じられ、又一面に、異趣のものであるから、見物人の批判が容易でない。そこに、少くとも、「負けない」だけの用意が出来てゐる。よく考へたものだと思ふ。能を作ることは、第一に自ら能を豊富に持つ結果となる。自分の演じ得る能が多くなければ、臨機応変に敵方の能と模様の変つたものを演ずることに支障が生じる。大きな店舗が各種の商品を豊富に具へて、如何なる客にも向くやうに準備するとの同一の理由である。第二の理由は、自作自演と、他人の作を演ずるとの相異である。「自作ならば、言葉ふるまひ案の内なり」であるが、他人の作はさうは行かぬ。他人は、

自分がやるために作るので、他の者がやるのに好都合には作つてゐないからである。

「手柄の精矯立合に見ゆべし」といふ手柄といふ語の中には、演技も勿論入つて居るはゐるが、他人の能と趣の変つたものを演ずるとか、又能を作るなどといふ、心のはたらきをもこの中に含めて考へるが良いと思ふ。それでないと、この語が生きない。

最後の申楽の当座に於て、演能に上中下があるといふ評論は、結局、

良き、能（曲）を持つ事が、最大の演技価値を發揮する為には、大切な要件である事を物語つたものと考へられる。演者は同様に苦心して上手に演じても、その能が、さほど名曲でないものは第二位になり、能柄が悪ければ第三位におちるからである。これも立合勝負に於て敵人の能に勝つためには、是非心得てゐなくてはならない。その為には、本説の正しい且つ珍らしいものを以て、幽玄に且つ面白いやうに能作する事が必要となつて来る。従つて自ら能を作る力量があることが、立合勝負に勝を制する重大な役目をつとめる事も明白である。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次著